

DGAKI-JSA 2019 報告③

帝京大学医学部内科学講座呼吸器・アレルギー学
長瀬洋之

フランクフルト郊外の静謐なホテルで、日本アレルギー学会とドイツアレルギー・臨床免疫学会 (DGAKI) の合同シンポジウムが開催されました。参加者は約 20 名で、コミュニケーションのとりやすい人数であったと思います。6つのセッションが設定され、各セッションとも日独から一人ずつの司会とスピーカーが出て、一題 30 分の講演が行われました。冒頭で、Margitta Worm 教授からご挨拶があり、温かな歓迎の意を感じました。Harald Renz 教授は、長身で穏やかな佇まいながら、日独交流への情熱が伝わってきました。次いで、出原賢治理事長も本シンポジウムへの期待を述べられました。

私は、喘息のセッションで、“Phenotypes and endotypes of severe asthma in Japan” のタイトルで、日本人喘息の特徴を主眼とする話の中で、日本のガイドライン、重症喘息や喘息死の疫学、低 BMI、スギ花粉症併存などの特徴について述べました。さらに、日本で展開されてきた FeNO やペリオスチンなどのバイオマーカー研究結果、日本人では 2 型炎症喘息が多い可能性があること、などを述べました。Christian Taube 教授 (Essen 大学) より、生物製剤をどう選ぶかとの質問があり、日本と共通の問題点を共有し、また、表現型同定の方法論についてもディスカッションを行いました。Taube 教授からは、“Asthma : from Immunosuppression to Immunomodulation” と題した、トランスレーショナルな講演を伺いました。

質疑は徐々に熱を帯び、予定の演題の一つは翌朝に持ち越されました。ディナーでは、ドイツの白ワインは勧められるが赤ワインはやめた方がよいなどのお話を伺ったり、子供の教育に熱心なことを感じたり、改めて交流を深めることができました。0 時頃まで歓談は続き、ドイツの先生の歓待に感動を覚えました。

翌日の休憩時間には、両国のガイドライン比較など、今後の交流プランについてドイツから積極的に提案して下さいました。Renz 教授から、両国の喘息表現型比較などの共同研究を是非行ってはどうかとご提案いただき、Taube 教授とメールで、今後の進め方を相談しています。また、DGAKI の学会誌が Allergo Journal International とのことで、Allergology International との相同性にも親しみを覚えました。シンポジウムは、この場限りではなく、今後の交流の始まりとの認識のもと、京都での再会を願って散会となりました。

また、中野先生、佐藤先生、中島先生、飯沼先生の、最先端の内容を含んだ英語プレゼンテーションも素晴らしく、日本人として感銘を受けました。最後に、このような機会を与えてくださいました、日本アレルギー学会、出原賢治理事長、浅野浩一郎国際交流委員長、そして学会事務局に深謝申し上げます。